

# 地方へのUターン者確保に関する考察 -東洋大生の能登ゼミ活動から見てきたこと-

研究員 高橋 一男 (国際学部国際地域学科 教授)

## 1. はじめに

東洋大学国際学部国際地域学科の正課授業である「地域社会学演習」のフィールドワークとして2012年から毎年9月に石川県奥能登において「能登ゼミ」を実施してきた。毎回12名から15名の学生が参加し約10日間のゼミ活動を通して奥能登のコミュニティについて学んできた。都市生活者であるゼミ生が、調査活動を通して都市にはない地域社会のあり方を目の当たりにして多くのことを学んだ。これまでに約120名の学生が奥能登を訪れたが、そのうち4名の卒業生が奥能登と加賀にIターン就職をした。石川県には何もゆかりはなく能登ゼミに参加したことで石川県を就職先に選んだ。彼らのIターンについて、その理由を分析した。加えて能登ゼミを通して参加ゼミ生は地方のコミュニティの特色と限界集落化が進んでいる奥能登の実態を学び、そこから奥能登の将来を考えた。換言すれば限界集落を存続させる、維持するためには何が必要か、さらに言うならば限界集落のすべてではないが、今日の課題として限界集落はどのように閉じるかを考えなければならぬ現実と直面した。解決策には多くの提案が見られるが、本論考ではIターン者に関する分析と、そこで得られた知見をもとにUターン者確保策について考察する。

## 2. 能登ゼミの変遷

2011年12月に石川県庁企画振興部の要請で「観光資源を活用した奥能登の活性化」について調査を実施し提言をしてほしい旨、依頼があったことが縁で当時の国際地域学部の教員で2012年2月に調査チームを組んで現地調査を行った。奥能登で特色のある仕事をしている人たちに会わせて欲しいと企画振興部をお願いして人選してもらった。そこで出会ったのが輪島市門前で手打ち蕎麦屋、手仕事屋を営んでいて能登定住・交流機構の元理事長である星野正光氏(故人)であった。奥能登の活性化を進めるために同志とともに同機構を起し多様な活動していた。星野氏との出会いがきっかけで2012年9月から「能登ゼミ」が始まったのである。

フィールドワークは輪島市門前をベースに奥能登で学生チームが各地に分散し地域の特色や住民の皆さんとの交流を通してコミュニティについて学ぶ機会を得た。調査地としては、星野氏と相談して輪島市門前、珠洲市、能登町、穴水町、志賀町、宝達志水町を選んだ。学生たちは、地域のお年寄りに会ってライフヒストリーを聞く時間を多くとった。その過程で地域の課題を見つけようと努力した。また地域の文化やそれを担う人々の実態を知る手立てとして七尾市中島町の「お熊甲祭り」、志賀町鶴野屋の秋の例大祭に参加し、客体ではなく主体として神輿やキリコを担いだ。

祭りへの参加が意味するところは、祭りの見学者としてではなく、祭りの実行者として地域住民側の視点で捉えることができた。地域では祭りの開催に向けて1年かけて準備をするが、学生は当日の参加なので見学者に近い立場である。しかし神輿やキリコを住民と一緒に担ぐことで祭りの担い手としての視点が生まれ、内側から見ることができたのである。祭りを運営することは共同作業である。住民相互の関わり方、結びつきを確認することができたのである。共同体とは何かについて学ぶ機会となったのである。もともと農山村、漁村では共同作業を通して住民の紐帯が強まり共同体が維持された。これをコミュニティとよぶならば、祭りも共同体の住民相互を結びつける共同作業であるわけである。

学生は「能登ゼミ」で多くのことを学んだが、そのすべてはコミュニティで展開されている人々の営みのことである。人々の関係性、つまりつながりを学び、コミュニティの機能を認識したのである。そこで意識されたことは都市のコミュニティでは見られないことばかりであった。都市にはコミュニティがあるのだろうか、あったのだろうかという疑問が芽生えた。それとも都市のコミュニティが消滅してしまったのだろうか。つまり、学生はフィールドワークを通して自然にコミュニティ論を展開していた。

「能登ゼミ」は2019年度も続いている。ゼミ生は卒業していくが「能登ゼミ」は8年間続いている。卒業生の中にはリピーターとして能登を訪れ、ゼミ当時にお世話になった皆さんと未だに交流が続いている。

### 3. 能登ゼミ生から4名のIターン者が誕生

「能登ゼミ」1期生の中から3名の女子学生が奥能登に就職を決めた。Sさんは珠洲市の地域づくり会社に、Cさんは輪島市の漆器工房に、Fさんは七尾市の老舗旅館にそれぞれ就職した。3人とも東京で就職活動をしたが、それでも最終的には能登に就職を決めた。

7期生の男子学生は、「能登ゼミ」に参加した後、1年間日本語パートナーズとしてタイに1年間滞在し、帰国後2019年6月に在学中であるが加賀市の地域おこし協力隊として採用された。

男子学生は2020年3月に卒業するが、まだ就職をして日が浅いので、ここでは先の3人の卒業生に聞いたIターン就職について振り返ってもらった記録を紹介する。

#### 【今、能登ゼミを振り返ってみて】

- 能登ゼミで与えられた課題以上に報告したいことがたくさんあった。宿のご飯が美味しかった、瓦屋根が美しかった、地元のおじいさんの方言がきつくて全く聞き取れなかった。たくさんのお会いがあった。
- 農業体験を通して、自給自足に近い生活をしている方々のほうが、よっぽど生活力があって、元気で、魅力溢れるように思った。

- 「過疎化が進んだ田舎」＝「元気がない高齢者が集まっている」という自分の差別的な考えが、全くの間違いだったということに気づかされた。

#### 【能登の魅力は？】

- 自分を温かく迎えてくれる人々がいる田舎ができたこと。
- 「能登の人に会いたい」という心を動かす何かがある。
- 能登には温かい人々がいるから、能登ゼミの後も頻繁に通うようになった。
- 能登ゼミ、能登でのインターンシップを経て、能登で活躍するエネルギーに溢れる方々にもっと出会いたいと思うようになった。
- 東京で就活をしていて心にモヤモヤしたものをずっと感じていた。そんな時に思い出すのが、能登ゼミでお世話になった方々の顔や、東京では見ることができない自然そのものの風景だった。
- 「どうして能登で出会った人々は、あんなに全力で、エネルギーに満ち溢れて生きているのだろう」という疑問から、能登の「人」たちに興味を持つようになった。そしていつか絶対、能登の人たちに会いに行こうという強い思いになった。

#### 【なぜ能登で就職？】

- 2014年（卒業の年）2月頃の手帳に「どっちの方がワクワクするか」と大きく書いてあった。その答えが能登で就職するという事になった。
- 仕事がないという意見が多くある一方で、多くの事業所は人材不足に頭を抱えている。特にサービス業は人材不足が深刻。繁忙期と閑散期とのギャップが大きい。勤務時間、収入が安定しないという問題あり。幾つかの事業所を掛け持ちで働く「多就業スタイル」が定着しつつある。若者の働き方提案に繋がっている。
- 東京で就活をしていて、どんな会社を受けても「本当にここで働きたいのか」「なんだか違うような気がする」という疑問を持っていた。そんな時思い出すのが能登での刺激的な体験であった。そして能登の人と出会いたいという思いから「サービス業」かつ「営業職」でインターンができるチャンスを待った。その結果、能登で働いてみるという自分と向き合うチャレンジがはじまった。
- 「刺激的だった能登ゼミでの体験」が「能登の人にもっと出会いたい」という欲求を生み、その欲求が「能登でインターンシップを体験したい」という意思を生み、インターンシップの活動が「能登で暮らして働きたい」という決意に至らしめたと思う。

#### 【能登で生活してみても】

- とにかく周囲の人々が温かく、いつも支えてくれている。
- 人口減少がいつも大きく取り上げられるが、人口が少ないからこそそれぞれの人とのつながりが強く、濃いものになっている。

- 金沢と奥能登を行ったり来たりする生活をしてみると、奥能登ではちゃんと暮らしたくなる。朝は早く起き、窓を開けて風を入れ、きちんと朝ご飯を食べる。夕ご飯は新鮮な魚を捌き、季節の野菜をたくさん食べる。人間として当たり前だけれど手を抜きがちなことを、ちゃんとやろうという気持ちにさせる何かが奥能登にはあるような気がする。

上記のインタビュー内容から多くの示唆が得られる。都市生活者である学生にとっては、能登の環境は東京のそれとはまったく異なる自然の豊かさに圧倒されるばかりであった。内浦、外浦とまったく異なる顔を見せる海、大地の恵みを提供する田畑や里山、その環境に合わせて生きる人々と生活の場である集落。その中に学生は身を置いて都市との違いを感じとった。

集落では都市にはない人間関係と他者に対する思いやりを見つけ心地よさや安堵を感じとった。同時に厳しさも味わった。都市では感じることもない別の人間関係、自然との関わりが人々の生活、行動までも支配している。きちんと関われば、それ以上の恩恵に与れることを学んだのである。地域社会が人を支え、育てることも学んだ。

共同体すなわちコミュニティは人を育て、守り、活かしていることが、都市にはない存在であることがわかり、更に働く場所があることも知り、能登での就職を決めたのである。都市にはないものが能登にあるから就職を決めたのである。都市にはすでに失われてしまったコミュニティが能登にはあったのである。

今や都市のまちづくりは箱モノをつくることに加え消滅しかかっているコミュニティを創成することが求められている。一方、地方ではコミュニティは残っているのに少子高齢化、人口流出で限界集落化がすすんでいる。今、地方の市町村では数々の優遇措置をとってUターン者を受け入れようと必死になっている。しかしそれはカンフル剤として機能しているが、長い目で見た地域の生き残り、活性化はその地域で生まれ育った人材のUターンが不可欠ではないだろうか。

#### 4. Uターン者への期待

「能登ゼミ」では学生たちが多くのライフヒストリーを採集した。持ち寄って内容を分析してみるとある共通点があることに気づいた。多くのやり取りの中に出てくる言葉があった。それは「ここには何もないから」という自分が住んでいる地域に対してネガティブな評価を下しているのである。しかし都市生活者である学生からみれば、都市にない資源がどれだけ豊かかということである。この相反する評価がぶつかり学生たちはいつも議論が沸騰する。

翻ってそこで生まれ育つ若者への影響はどうなっているのだろうか。想像は難くない。小さい頃から両親、祖父母たちから「ここは何もない」と言われて育てばそのように思うしかないので、進学、就職を機に故郷を出て行ってしまおう若者が多いのである。

そのような生育環境、教育環境でよいのだろうか。まずそこから見直す必要がある。何故なら

外部の立場からみてたいへん豊かな資源をかかえている地域であるので、地域の人々がこのことに気づき、意識を変える必要がある。

人間にとって生活の場所を変えることは悪いことではなく、むしろ自分の軸足を置いている地域をより深く理解することができる。したがって故郷を一度出て教育を受け、仕事を経験することは異文化理解がすすみ、さらに自文化もあらためて評価ができるようになるのである。

「何もない」という言葉には仕事が無いということを意味することが多い。その仕事とは役場、農協、漁協、各種団体等の職員、銀行、保険など、公務員、団体職員、会社員といった安定した給与所得がある職業を指していることが多い。現代社会においては安定した仕事などはないと思った方がよい。そのぶん自らが起業することが自由な時代なので、仕事は自分でつくるものと考えた方がよい。

都市生活者は一見所得が高いので安定した生活していると思われがちである。しかし所得が高いのと同時に支出も多いので、都市と地方を比較すると地方の方が生活しやすい場合も多い。都市生活は、簡単、便利、快適を求めることができるが、消費生活にかかる負担が大きいことも実感を持って言える。地方の方が生活しやすさを取り上げたら悪くはないのである。むしろ人間らしい生活が享受できるのである。であれば、都市で教育を受け、社会で働き、更に海外で生活する経験をしたならば、故郷に戻って自分らしい生活を創造すれば、自分が帰属するコミュニティが活性化するロードマップも描けるのではないだろうか。それがUターン者へのコミュニティからの期待でもある。

## 5. 「地域学」のすすめ

I ターン者の地域づくりにおける役割はカンフル剤として現状を活性化することに該当するのではないだろうか。現代の地方ではなくてはならない存在である。しかし今後、持続可能なコミュニティづくりを考える時、地域で生まれ育ったUターン者の存在が必要不可欠である。しかし先に言及したとおり「ここは何もない」と言われて育った人たちが戻ってくることを期待できない。

未来をささえる人口を確保するためには10代のころ、就職か進学かを決める時期にきちんと地域の資源は豊かであることを学校で教えるべきである。同時に就職でも進学でも、一度地域を出てみることもいいことであると教えるべきではないか。そこで、当該地域、それを包含する広域の「地域資源」を底流とした「地域学」を構築することを提案したい。

コンテンツの骨子は地域資源である。ここで言う地域資源とは次の五つの要素で構成される。

1. ヒト（地域の担い手として長年従事活躍している人材）
2. モノ（地域の生産材）
3. コト（地域が培ってきた文化、習慣）〈民俗学的観点から〉
4. シゼン（地域を包括する自然環境、里山里海）
5. トキ（地域の歴史）

この「地域学」は中等教育で開講されるのが適切かと考える。就職、進学を判断する時期に地域の豊かさを受講者自らが考える機会をつくることが肝要である。座学だけではなく、現場に出かけて行って受講者が五感を使って考える機会を提供することが求められる。こうした地域に対する再認識こそが、将来のUターン人材の確保につながるものと考えられる。「地域学」の構築と教育現場での実践が地域づくりのプログラムとして期待される。

#### 参考文献

伊藤香織、紫牟田伸子監修（2008）、『シビックプライドー都市のコミュニケーションをデザインするー』、宣伝会議

伊藤香織、紫牟田伸子監修（2015）、『シビックプライド2【国内編】ー都市と市民のかかわりをデザインするー』、宣伝会議

寺本英仁（2018）、『ビレッジプライド』、ブックマン社

農文教編（2017）、『シリーズ田園回帰』第1巻～第8巻、農山漁村文化協会